

第33回東京国際映画祭 レッドカーペットアライバル/クロージング・セレモニー



今年は、オープニング・セレモニー会場となった東京フォーラム（東京都千代田区）・ホールCのロビーで、レッドカーペット・イベントとして行われた。（©2020 TIFF）

第33回東京国際映画祭のクロージング・セレモニーが11月9日、東京・TOHOシネマズ六本木ヒルズで行われた。「TOKYO プレミア 2020」部門の上映作品を対象とした観客賞/東京都知事賞は、大九明子監督の新作『私をくいとめて』が受賞。大九監督のほか、のんが登壇し、共演の林遣都、橋本愛が喜びのメッセージを寄せた。

「インターナショナル・コンペティション」「アジアの未来」「日本映画スプラッシュ」の3部門を統合した「TOKYO プレミア 2020」では、32本を上映（オープニング作品『アンダードッグ』を含む）。芥川賞作家・綿矢りさ氏の著作を映画化した『私をくいとめて』は、おひとりさまライフを満喫する31歳のみつ子（のん）が、脳内の相談役「A」とともに年下男子との恋に挑む「崖っぴちロマンス」を描いた。第30回のコンペティション部門では、『勝手にふるえてろ』（原作：綿矢りさ）で観客賞に輝いた大九監督。「観客賞は頂戴したのは、2度目のこと。しかし、3年前に受賞した時とは、世界が全く異なる状況ですし、この映画祭も全く違う形になりました」と口火を切った。

多くの映画祭がオンライン開催となるなかで「東京国際映画祭は、実際にお客様をお入れして、同じ劇場、同じ時間、一緒にスクリーンへ向き合うということを実現させました。これは素晴らしいことだと思います。まだまだ出歩くことに不安を抱きながらも、チケットをとって劇場に足を運んでいただき、映画をご覧になって点数を入



観客賞/東京都知事賞は、『私をくいとめて』が受賞。大九明子監督と、主演の女優のんが登壇。（©2020 TIFF）

れて頂いた。おひとりおひとりの1票が、私共に賞をくださったこと、いつも以上に感慨ひとしおです」と感謝しきりの大九監督。そして「早く直接握手をしたり、お話をしたりする時が来ることを祈っています」と思いの丈を述べていた。

のんは「毎年設けられている賞だとは思いますが、今年は「唯一の賞」。とても嬉しく思っています。私事ではありますが、何年ぶりかの主演映画に参加させていただき、本当に本当に心から喜びでいっぱいです」と胸中を吐露。「映画というのは観客の皆さんに見ていただき完成するものだと思います。今回この賞を大切に受け止めたいです。この映画は12月18日に全国公開。見て頂いた皆さんと一緒に、この映画を盛り上げていけるように頑張りたい。面白いと思っただ方は、是非是非SNSに感想をあげたり、お友達や家族におすすめしてくれると嬉しいです」とアピールしていた。

また、本年度の動員数（速報値・9日は見込み動員数）も発表された。公式上



クロージング作品「HOKUSAI」の橋本一監督、柳楽優弥、田中泯、河原れんも登壇。（©2020 TIFF）

映動員数/公式上映作品数は「4万533人/138本 10日間」（第32回：6万4492人/183本 9日間）、その他リアルイベントの動員数は7272人、オンラインイベント動員数は84万7873人、共催/提携企画動員数は約3万3000人に。また、公式上映作品における女性監督の比率（男女共同監督作品を含む）は16.7%（138本中23本）となった。

チェアマン・安藤裕康氏は「新型コロナウイルスの厳しい状況のなか、ゴールまでたどり着くことができるのかと、毎日心配しておりました。しかし、今日こうしてフィナーレを飾ることができたこと、胸がいっぱいです。シェイクスピアが言ったように「終わりよければ全てよし」でございます」と振り返る。「一番感謝を申し上げたいのは、観客の皆さん。厳しい状況にもかかわらず、劇場に足を運んでいただいた。今年の映画祭の主役は、観客の皆さんでした」と言葉を投げかけていた。